

『逆修説法』第三七日の本願解釈

——選択本願念仏説・第十八願本体説・本願根本説——

角 野 玄 樹

〔抄 録〕

法然『逆修説法』第三七日における本願解釈について論じる。

選択本願念仏説・第十八願本体説（第十八願が本願の本体・中心であるという説とする）・本願根本説（本願が念仏往生の根本・起源であるという説とする）について詳しく分析し、それらを含む同書第三七日の本願解釈の各要素の関係を明らかにする。

その中でも特に、選択本願念仏説は、当該箇所において、重要

な役割を果たしており、不可欠な要素である。同説の論理構造などにより、同書における種々の本願解釈に整合性をもたらす。

キーワード 法然、『逆修説法』、選択本願念仏説、第十八願本体

説、本願根本説

はじめに

本稿では、『逆修説法』第三七日における選択本願念仏説・第十八願本体説（以下、第十八願が本願の本体・中心であるという説とする）・本願根本説（以下、本願が念仏往生の根本・起源であるという説とする）などを中心に検討する。これら本願解釈の諸要素の関係を明らかにしたい。

同書第三七日の本願解釈は、選択本願念仏説・第十八願本体説・念

仏往生の本願根本説など、重要な要素が連なっている。しかし、これらの関係を詳論した先行研究はないようである。^①そこで本稿では、これらの要素を分析し、当該文の全体の構成がどのようなものになっているのか、検討したい。

また、選択本願念仏説が、第十九願・第二十願について、間接的に位置付けをしており、このことが、同説の分析により判明する。すなわち、第十八願の念仏の選取・諸行の選捨と、第十九願・第二十願の諸行往生とが、十分両立することを指摘する。

第一節 当該文の概要

『逆修説法』 第三七日における本願解釈の全文を、長文だが以下に引用する。(資料1では、筆者が適宜改行し、頭に番号を付した。)

(資料1)

①次双卷無量寿經者、淨土三部經中、猶此經為根本也。其故一切諸善願為根本。然此經說彌陀如來、因位願謂、乃往過去久遠無量無數劫有仏、申世自在王仏。其時有一人國王。聞仏說法、發無上道心、捨國棄王出家、成沙門。名曰法藏比丘。即詣世自在王仏所、右遶三匝、長跪合掌、奉讃仏白言、我設淨土欲度衆生。願為我說經法。爾時世自在王仏、為法藏比丘說二百一十億諸仏淨土人天善惡國土、微妙、又現之與給。法藏比丘聞仏所說、又見嚴淨國土已後、五劫間思惟、取捨從二百一十億淨土中、撰取而設四十八誓願給。從二百一十億之國中、善惡之中、捨惡取善、微妙之中、捨麁取妙、如是取捨撰取、發此四十八願故、此經同本異訳、大阿彌陀經。此願被説撰取願。

②其撰取之様粗申開候者、先初無三惡趣願者、彼諸仏國土中撰捨有三惡道、撰取無三惡道、而為我願。次不更惡趣願者、撰捨彼諸仏國中設國中、雖無三惡道、彼國衆生有更墮他方三惡道之國、撰取惣不更三惡道之國、而為我願也。次悉皆金色願、次無有好醜願、凡一々願皆如此可知。第十八念仏往生願者、彼二百一十億諸仏國土中、或有以下布施為往生業之國、或有下持戒及禪定智慧等乃至發菩提心持經持咒等孝養父母奉事師長以如是種々

行各為往生之國。或又有以下專称念其國教主名号為往生之國。然彼法藏比丘、撰捨以余行為往生之國、撰取以名号為往生之國、立我土往生之行如上也。次來迎引攝願係念定生願、皆如此撰取願給。凡始自無三惡趣願終至得三法忍、思惟撰取之間逕五劫也。如是撰取撰取後詣仏所一々説之。

③説其四十八願已後又以偈曰、我建超世願、必至無上道、斯願不満足、誓不成正覺。乃至斯願若剋果、大千感動、虚空諸天人、當雨珍妙花云。彼比丘説此偈、竟、応時普地六種震動、天雨、妙花散其上。自然音樂聞于空中、又空中讃曰、決定必成無上正覺。然者言彼法藏比丘四十八願、一々成就決定可成仏者、其初發願時、於世自在王仏御前諸魔竜神八部一切大衆中兼顯事也。

④爾者彼世自在王仏之法中、法藏菩薩四十八願經、受持誦之、今雖釈迦法中、仰彼仏願力願生彼國者、入此法藏菩薩四十八願法門也。即道綽禪師善導和尚等入此法藏菩薩四十八願法門給也。彼法藏宗人持花嚴經、或三論宗人持般若等、或法相宗人持瑜伽唯識、或天台宗人持法花、或善無畏持大日經、又金剛智持金剛頂經。如是各隨宗持依經依論也。今宗淨土人、依此經可持四十八願法門也。持此經者、則持彌陀本願者也。即法藏菩薩四十八願法門也。其四十八願中以第十八念仏往生願而為本体也。故善導曰、弘誓多門四十八、偏標念仏最為親云。念仏往生者、源從此本願起。然者觀經彌陀經所説念仏往生旨乃至余

諸經中所説、皆以此經所説本願為根本也。何以知レ之者、觀經所説光明攝取善導釈給、唯有念仏蒙光照、当知本願最為強云。此釈意者、本願故光明攝取聞矣。又此經下品上生双説聞經、稱仏讚稱仏之功、不讚聞經之所善導釈云、望仏願意者、唯勸正念稱名。往生義疾不同雜散之業云云。此亦本願故、讚稱仏聞矣。又釈同經付属文、望仏本願、意在衆生一向專称弥陀仏名云。此亦弥陀本願故、釈尊付属流通給聞矣。又阿弥陀經所説之一日七日念仏、善導釈給、直為弥陀弘誓重、致使凡夫念即生云。此亦一日七日念仏弥陀本願故、往生聞矣。乃至双卷經中三輩已下説文、皆由本願也。凡不限此三部經、一切諸經中所説之念仏往生、皆望此經本願説也。例之応レ知矣。

⑤抑法蔵菩薩、何者捨余行、唯以称名念仏一行而立本願給云、此有二義。一者念仏殊勝功德故、二者念仏易行故遍于諸機故、初殊勝功德故者、彼仏因果惣別一切万徳皆悉名号顕故、一度唱南無阿弥陀仏得大善根也。是以西方要決云、諸仏願行成此果名、但能念号具包衆徳故、成大善不廢往生云云。又此經即指一念讚無上功德。然者殊勝大善根故、撰之為本願給也。二易修故者、申南無阿弥陀仏者、何愚痴者少、易被申故、以平等慈悲御意立其行給。若以布施為本願者、貧窮困乏輩断往生望。若以持戒為本願、破戒者無戒類亦可断往生望。若以禪定為本願者、散乱龜動之輩不可往生。若以智慧為本願者、愚痴下智者不可往生。自余之諸行准之、應レ知。然堪布施持戒等諸行者、極少、貧窮破戒散乱愚痴輩甚多。爾者以

上諸行為本願給者、得往生者少、不得往生者多矣。因茲法蔵菩薩、被催平等慈悲、為遍摂一切、不下以彼諸行為往生本願、唯以称名念仏一行為其本願給也。故法照禪師云、於未來世惡衆生、称念西方弥陀号、依仏本願出生死、以直心、故生極樂、彼仏因中立弘誓、聞名念我惣来迎、不簡貧窮將富貴、不簡下智与高才、不簡多聞持淨戒、不簡破戒罪根深、但使廻心多念仏、能令瓦礫變成金云云。

⑥雖立如此誓願、其願不成就者、非正可憑。然彼法蔵菩薩願、一々成就既成仏、其中此念仏往生願成就文云、諸有衆生、聞其名号信心歡喜乃至一念至心回向願生彼国、即得往生住不退転云云。この資料1の本願釈の内容は、以下の如くである。

まず資料1①②では、『無量寿經』は、浄土三部經の中の根本であるとする。その証拠文に、文献名はあげないが、『十住毘婆娑論』の文を改変して引く。すなわち全ての善は、誓願が根本である、と。そして同經では、阿弥陀仏の因位の願を説くのだと指摘する。同經の内容容である世自在王仏や法蔵菩薩の話の取意を示す。『大阿弥陀經』を根拠にしながら、『無量寿經』では、法蔵菩薩の選択の願を説くと述べる。第一・二・十八願などの選択の願の内容を示す。

次に資料1③④では、その選択の願を誓ったあと、法蔵菩薩は、世自在王仏のもとで、四誓偈を説き、大地が六種に震動し、天から妙華が降るなどし、法蔵菩薩が必ず成仏する旨が約束されたとする。法然

は、法蔵菩薩の四十八願の法門に入ること勧める。他宗において、それぞれ所依の經に従うように、浄土を宗とする人は、この『無量寿經』に依り、四十八願の法門を保持すべきことを述べる。法然は、その四十八願のうち、第十八願が本体であるとする。その証拠文として、『善導』『法事讃』の文を引用する。

そして念仏往生の起源はこの本願であり、『観經』・『阿弥陀經』・一切諸經における念仏往生は、本願を根本とすると述べる。その典拠として、『観經』攝取文・『観經』化讃文・『観經』付属文・『阿弥陀經』一日七日念仏文などを、善導の解釈を添えて述べる。更に、『無量寿經』三輩文以降や、その他一切諸經の念仏往生文も、本願を参照して成立している旨を示す。

次に資料1⑤⑥である。そもそも、念仏を選び、諸行を捨てての根拠は何かと問いを設け、その解答として、殊勝功德・易行故遍于諸機の二義を述べる。そして、『無量寿經』では、これら四十八願などの誓願が、実際に成就されたことを説く旨を示し、第十八願願成就文を引用して、第三七日の本願解釈を締めくくる。

この資料1の内容のうち、本稿では、選択本願念仏説・第十八願本体説・念仏往生の本願根本説に特に着目して、これらの要素を第二節以降において検討する。

第二節 選択本願念仏説

第二節第一項 選択本願念仏説の論理構造

選択本願念仏説について、第一項・第二項に分けて検討してみる。まずは、同説の論理構造であるが、次のような問いを設けよう。すなわち第十八願では、諸行を捨て、念仏のみを取っているのに、念仏のみを主張するといえるが、四十八願には、他に第十九願・第二十願などに、諸行により往生するという文もある。第十八願で諸行を捨てる一方、この第十九・二十願の諸行往生に対し、法然は、どのように対処したのであるのか、という問いである。

法然は、第十九・二十願について、第十八願などと違って、選択説を用いての解説文はない。しかし直接的には触れないが、間接的にこれら第十九・二十願の位置付けをしているのである。それを本項で示したいが、それには、選択本願念仏説の論理構造に目を向ける必要がある。

資料1②にあるように、選択本願念仏説は、法蔵菩薩が、念仏にするか、諸行にするか、それを選ぶというものである。そして、念仏を選んで本願として往生行とし、諸行を捨てて本願とせず往生行としない。すなわち、次の文のように示しうる。

（資料2 a）

念仏と諸行の中で選取して本願として往生行とするならば、念仏一行である。

（資料3 a）

念仏と諸行の中で選捨して本願とせず往生行としないならば、諸行である。

資料2 aが念仏一行の選取に該当し、資料3 aが諸行の選捨に該当す

る。前者は、法蔵菩薩が、念仏と諸行の中で選取して本願として往生行とすることを、先に固定して前提とする。そして、念仏一行を結論とするということである。後者は、法蔵菩薩が、念仏と諸行の中で選捨して本願とせず往生行としないことを、先に固定して前提とする。そして、諸行を結論とするということである。この資料2a・資料3aは、次のように換言しても、差し支えなからう。

(資料2b)

念仏と諸行の中で主張するならば、念仏一行である。

(資料3b)

念仏と諸行の中で主張しないならば、諸行である。

資料2a・資料3aと、資料2b・資料3bとは、へ選取して本願として往生行とする↓主張するへ選捨して本願とせず往生行としない↓主張しないへと言い換えたものである。

ここで、第十九願・第二十願の選択説を推測してみよう。⁽⁵⁾このうち、資料3bにより、第十九願・第二十願の選択説の論理構造は、少なくとも、

(資料4)

修行の中で主張するならば、諸行である。

ということにはならない。なぜなら、資料4は、資料3a・bと矛盾するからである。矛盾するようなことを、同じ誓願内で法蔵菩薩がするはずがない。したがって、第十九願・第二十願の選択説の論理構造は、資料4であってはならない。

では、第十九願・第二十願の選択説の論理構造はいかなるものか。

それは、先にも指摘したように、法然は直接的には何もいわない。しかしとにかく、資料4でないことは確かである。予想される論理構造としては、第十九願の場合、

(資料5a)

諸行を修行して、来迎・往生するか否かを選択して本願とするならば、来迎・往生することである。

となり、第二十願は、

(資料6a)

繫念かつ諸行を修行して、往生するか否かを選択して本願とするならば、往生することである。

であろう。すなわち資料5aの第十九願は、諸行を修行して、来迎・往生するか否かを選択して本願とすることを前提とし、来迎・往生を結論とする。また資料6aの第二十願は、繫念かつ諸行を修行して、往生するか否かを選択して本願とすることを前提とし、往生を結論とする。

この資料5a・6aは、以下のような事態としてとらえうる。

(資料5b)

諸行を修行するならば、来迎・往生する。

(資料6b)

繫念と諸行を修行するならば、往生する。

つまり両願共に、諸行をすることを前提として、(来迎・)往生することを主張している。これは、諸行による往生という事態を示していると理解して、大過なからう。

これらを見て、もしかすると、第十八願の選捨の資料3 a・bと、第十九・二十願の資料5 a・b・資料6 a・bとは矛盾するのでは、と思われる方もおられるかもしれない。あるいは、第十八願の選取の資料2 a・bと、第十九・二十願の資料5 a・b・資料6 a・bとは、やはり矛盾するのではないか、と思われる方もおられるかもしれない。いずれにせよ、両者が矛盾するならば、法蔵菩薩は同じ誓願内において、矛盾をしていることになり、不合理ということになる。しかし、両者は矛盾していない。資料2 b・資料3 bを、法然の立場に沿った肯定的解釈をするならば、以下のようになるだろう。すなわち、第十八願の選取の資料2 bは、

（資料2 c）

念仏と諸行の中で勧めるならば、念仏一行である。

となり、第十八願の選捨の資料3 bは、

（資料3 c）

念仏と諸行の中で勧めないならば、諸行である。

となる。しかし実は、第十九願・第二十願は、資料5 b・資料6 bのように、諸行で往生できる事態を示しているのであって、諸行を主張しているのでもなく、勧めているわけでもない。故に、資料2 a・c・資料3 a・cと、資料5 a・b・資料6 a・bとは、矛盾していない。十分両立可能である。前者は、何を主張し勧めるのか否かの次元内である。後者は、諸行によつて往生するかという次元内である。両者の次元は異なるため、矛盾はない⁶。

このように考えると、先の問いに対する解答も自ずから出るであらう。

う。すなわち問いは、第十八願で念仏一行を選び、諸行を捨てているにも関わらず、第十九・二十願において、諸行往生を説く。これをどう考えるか、というものであった。これに対する解答は、第十八願における選択本願念仏説は、念仏一行を主張し、諸行を主張しないということである。それに対し、第十九・二十願は、実は諸行によつても一応往生可能という事態を示したものである。つまり、第十九・二十願では、諸行を主張せず勧めていないことである。

法然は、第十九・二十願について、選択の語を用いての直接的解釈を何もしていない。しかし、第十八願の選択本願念仏説により、間接的に、第十九・二十願の位置付けをしているのである。少なくとも、資料4のように、“修行の中で主張するならば、諸行である。”とはしていない。資料4ではないことは明確である。資料4ではないということは、諸行を主張したり勧めているわけではないのである。第十八願は、四十八願に含まれているものである。故に、資料4ではないことは、四十八願全体の趣旨でもある。四十八願全体の趣旨は、諸行を主張せず勧めないということである。第十九・二十願も四十八願の中の誓願なので、やはり、これらの願でも、諸行を主張せず勧めないのである。こうして、間接的に第十九・二十願の位置付けを行っているのである。

第二節第二項 諸行非往生行のため第十九・二十願は無効か

以上の私見に対し、次のような疑問もありえるだろう。『逆修説法』の選択本願念仏説（資料1②）において、

(資料7)

然彼法蔵比丘、撰捨以_テ余行_ヲ為_ニ往生行_ノ之國_ト、撰取以_ニ名号_一為_ニ往生行_ノ之國_ト、立_下我土往生之行如_レ是_上也。

とある。特に、傍線部に注目する。傍線部は、「阿弥陀仏の極楽国土の往生行は、念仏一行である」ということであろう。だとすれば、これに対する諸行は、明言はないが、「阿弥陀仏の極楽国土の往生行は、諸行ではない」ということになるだろう。つまり、「諸行は往生行ではない」ということである。諸行は往生行でないならば、諸行では往生できないようにも見える。よって、第十九願・第二十願の諸行往生は無効である、という疑問が生じうるであろう。

この疑問に対して、以下で議論してみよう。まず注意したいのは、ここで述べる「往生行」という表現である。実は、第十八願の選取という往生行と、第十九願・第二十願に含む往生行とは、異質の往生行なのである。すなわち、前者の往生行とは、狭義の本願領域内のものである。後者の往生行とは、狭義の本願領域外のものである。つまり、『選択集』の表現を借りれば、前者の往生行とは、本願の行である。後者の往生行とは、非本願の行である。

このような狭義の本願領域内の往生行（＝本願の行）と、狭義の本願領域外の往生行（＝非本願の行）になぜ峻別できるのか、以下に説明したいが、まずは『選択集』の本願の行と非本願の行について考察する。以下のように問題提起してみよう。なぜ諸行は非本願の行なのか、第十九・二十願のまさに本願で諸行を説くのに、なぜ非本願の行といえるのだろうか。

この問題提起に対しては、選択説を考慮に入れる必要がある。第十八願の選択本願念仏説では、念仏と諸行の中から、念仏一行を選取し、諸行を選捨している。この時、本願（法蔵菩薩の願い）は、狭義では念仏一行を指す。そしてその場合、第十八願の選択の前提である、「念仏と諸行」とは、狭義では本願（法蔵菩薩の願い）ではない。それは予め二百一十億の国土によって決定している要素であって、本願（法蔵菩薩の願い）ではないのである。また第十八願の選択全体の文は、本願（法蔵菩薩の願い）といえる。つまり、「念仏と諸行の中から、念仏一行を選取し、諸行を選捨している」という全体の文は、本願（法蔵菩薩の願い）といえる。

これを譬えを設けて説明してみよう。太郎という人が、或る目的地に向かって道を歩いているとしよう。すると分岐点に着き、右と左の道があるとする。いずれも目的地に行けるが、右は近道、左は遠回りとしよう。太郎は右の近道を選び希望し、目的地に向かう。この譬えでは、太郎が右と左の道を選んで希望するわけである。この選び・希望するなどを選_{せん}択_{たく}や本願とすることに譬えよう。

もしこの太郎に、「右の道か左の道か、どちらが君の願いの道か」と聞けば、太郎は「右の道だ」と答えるだろう。これは、選取し本願としていることに譬えている。つまり、法蔵菩薩に、「Aか非Aか、どちらが本願（法蔵菩薩の願い）でしょうか」と質問すれば、法蔵菩薩は選取したほうが本願（法蔵菩薩の願い）と答えるだろう。

もし太郎に、「右の道か左の道かについて、右の道を希望し選んだ」という文全体の内容は、君の願いか」と聞けば、太郎は「そうだ、

その内容は私の願いだ」と答えるに違いない。これは、第十八願や第十九願・第二十願の選択の文全体が本願であることに譬える。つまり、法蔵菩薩に、「念仏と諸行の中から、念仏一行を選択し、諸行を選捨している」という内容は、本願（法蔵菩薩の願い）でしょうか」と聞けば、法蔵菩薩は「そうだ」と答えるだろう。

もし太郎に、「右の道と左の道」というのは、君の願いか」と聞けば、太郎は怪訝な顔で、「いや、そうではない。『右の道と左の道』というのは、自然に決まっていることであって、私の願いではない」というように答えるに違いない。この「右の道と左の道」というのは、選択説のAか非Aという前提部分を指す。第十八願でいえば、「念仏か諸行か」であり、第十九願・第二十願でいえば、「諸行を修行するに往生するか否か」であろう。この「念仏か諸行か」「諸行を修行するに往生するか否か」などは、選択説の前提であり、狭義では、本願（法蔵菩薩の願い）ではないのである。予め二百一十億の国土の中で決定している前提条件なのであって、法蔵菩薩が選んで願っているのではないのである。そして、その中から、選択した結果の「念仏一行」や「往生する」が本願（法蔵菩薩の願い）なのである。

何が本願なのかそうでないのか、ということについては、以上のような譬えを用いて、説明可能であろう。つまり、その本願の選択説の論理構造により、何が本願かそうでないのかということが決まってくるということなのである。第十八願の念仏一行の結論部分は、本願であるということになる。また、第十八願や第十九・二十願の選択説全体の文は、本願であることになる。そして、第十八願や第十九・二十

願の選択の前提は、本願（法蔵菩薩の願い）ではない。つまり、「念仏か諸行か」や「諸行を修行して往生するか否か」の部分は、狭義では、本願（法蔵菩薩の願い）ではないのである。

このように、第十九願・第二十願の前提の「諸行を修行する」という部分は、狭義では、本願ではないといえる。また、第十八願の選択においても、諸行を選捨し本願としていない。よって、『選択集』では、諸行は非本願の行といえるのである。選択説をへた四十八願においては、諸行は非本願の行なのである。つまり、『選択集』の本願の行・非本願の行の「本願」とは、狭義のものなのである。

今度は、本願領域内・本願領域外の表現を用いて説明をしよう。筆者は上記において、第十八願の選択の往生行とは、狭義の本願領域内であり、本願の行とした。第十九願・第二十願を含む往生行とは、狭義の本願領域外で、非本願の行とした。このうち、第十八願のほうを見るに、第十八願の「往生行」とは、資料7傍線部の「阿弥陀仏の極楽国土の往生行は、念仏一行である」の「往生行」のことである。この往生行は、「本願に立てる往生行」を意味する。よってこれは、狭義の本願領域内の往生行といえるのである。そしてこの資料7から展開して帰結する「諸行は往生行ではない」という内容は、実は簡略した表現であって、もう少し詳しく表記すると、「諸行は本願に立てている往生行ではない」という内容なのである。この「諸行は本願に立てている往生行ではない」は、諸行非本願の行の先の議論と併せて考えると、「諸行は本願に立っていない往生行である」と同じ内容である。これはつまり、諸行は狭義の本願領域外ということの意味するの

である。すなわち、第十八願解釈の資料7傍線部から展開する内容は、諸行をどうあつても非往生行とするものではなく、狭義の本願領域外では、往生行という意味を残すものなのである。

また、第十九願・第二十願に含む往生行とは、諸行のことである。そして、それは選択説の論理構造でいえば、前提部分であり、狭義では、非本願の行なのである。すなわち、この第十九願・第二十願に含む往生行は、狭義の本願領域外のものといえる。

つまり、ここで述べている狭義の本願領域内・狭義の本願領域外の「本願」は、選択説の選択の前提部分ではなく、結論の部分である。狭義の本願（法蔵菩薩の願い）のことである。その狭義の本願の領域か否かが、狭義の本願領域内・狭義の本願領域外なのである。第十九・二十願の往生行とは、選択説の結論ではなく、前提部分なので、狭義の本願領域外である。そして、両願の文を見れば、諸行が往生行であることは自然な理解である。したがって、両願の諸行は、狭義の本願領域外ではあるが、厳然たる往生行なのである。また、加えて第十八願では、諸行を選捨し本願としていないので、やはり狭義の本願領域外である。つまり、四十八願内の諸行とは、いずれにせよ、狭義の本願領域外の往生行であり、非本願の行なのである。

こうして第十八願にしろ、第十九・二十願にしろ、諸行はとにかく狭義の本願領域外の往生行であり、非本願の行なのである。よって、先の疑問に答えることが可能となる。先の疑問とは、「資料7から、諸行は往生行ではないと帰結しえるので、諸行では往生できず、したがって、第十九願・第二十願は無効なのでは」という疑問であった。

これに対し、次のように答える。先の疑問の「諸行は往生行ではない」というのは、厳密には、「諸行は本願に立っていない往生行である」であつて、諸行は本願領域外の往生行という意味を含むのである。つまり、「諸行は第十八願において往生行ではない」から、必ずしも「諸行では往生できない」は帰結しない。論理的飛躍をしまつているのである。諸行は狭義の本願領域外では、往生行なのである。故に、諸行往生の道は存在している。したがって、選択本願念仏説により、「諸行は第十八願において往生行ではない」といっても、実際は、「諸行は本願に立っていない往生行である」であつて、諸行による往生の道は、まだ可能性が残されているのである。こうして疑問を解決できる。第十九・二十願は有効であると考ええる。つまり、諸行往生は、第十九・二十願に一応説かれており、本願力による諸行往生はありうる。ただし、諸行往生を事態として法然は認めるのであつて、諸行往生を主張せず勧めていない。¹⁰⁾

第三節 第十八願本体説と本願根本説

第三節第一項 第十八願本体説と本願根本説との関係

『逆修説法』第三七日では、四十八願のうち、第十八願を本体と説く。また同書では、念仏往生は、本願を根本ともする（資料1④）。この第十八願本体説と本願根本説との関係を探る。

前者の典拠として、善導『法事讃』の文を引用している。すなわち同書では、誓願は四十八あるが、その中で特に最も親しいのが念仏で

あると説く。念仏を説くのは、第十八願故、この善導の文から、第十八願を本体としているのだろう。

第十八願本体説の典拠は、『法事讃』であるわけだが、道理としての根拠は、どのようなものであるのか、以下に議論しよう。資料①①には、以下の文がある。

（資料⑧）

名曰^ナ法蔵比丘^{ヒク}。即詣^ト世自在王仏所^ニ。右邊^{ミナ}三匠^ニ長跪合掌奉^テ讃^シ。仏白^ク言^フ、我設^チ淨土^ニ欲^フ度^フ衆生^ヲ。願^ハ為^レ我説^カ經法^ヲ。

資料⑧の傍線部に注目する。法蔵菩薩が、淨土を設けて、衆生をその淨土に渡したいことを述べている。この内容は、四十八願を立てる目的である。衆生を淨土に渡すために、四十八願を立てるのである。この衆生を淨土に渡すという内容から、四十八願でいえば、直接的には、往生行についての願に限定されることになるだろう。すなわち、第十八・十九・二十願である。そして、この三つの願に選択説が加わると、第十八願が帰結する。なぜなら、上記の選択説の理論により、まさに今話題の往生行を主張するのは、第十八願のみだからである。

このように、資料⑧傍線部と選択説があれば、第十八願が帰結する。資料⑧傍線部は四十八願を立てる目的のだから、それに関する願が中心となる。すなわち、第十八・十九・二十願の往生行についての願である。そして、まさに今話題の往生行を主張するのは、選択説により、第十八願なのである。第十八願が三つの願の中心であり、更には、四十八願の中心なのである。つまり、第十八願本体説である。以上の私見が、第十八願本体説の道理上の根拠である。

一方、後者の本願根本説は、第十八願本体説で提示した念仏往生を承けて、本願根本説を説いているのだろう。そのような意味で、本願根本説は、第十八願本体説の側面ではないだろうか。すなわち、本願根本説では、その念仏往生は本願を根本とするが、この念仏往生を提示して、それを本願にあてがったならば、第十八願が中心となって、その念仏往生を支えている構造が現れる。すなわち、この場合の「本願」とは、四十八願のことである^⑫。第十八願は四十八願の一部であり、不可離である。なぜなら、第十八願のみでは、十全な念仏往生は実現しない。四十八願で説くような阿弥陀仏や極樂が存在しないと、十全な念仏往生とはいえない。かくして、四十八願と不可離な第十八願が中心となって、念仏往生を支えているのである^⑬。

このような構造は第十八願が本体といえる。念仏往生を中心となつて支えているのは、第十八願だからである。したがって右記のように、本願根本説は、第十八願本体説の側面である。あるいは、第十八願本体説を維持したまま、本願根本説が成立しているともいえる。

そして、本願根本説の例証として、『観經』摂取文・同經化讃文・同經付属文・『阿弥陀經』一日七日念仏文などを、善導の解釈を添えて取りあげている。いずれの念仏の要文も、善導の解釈では、本願に従っている旨を示している。本願根本説の例証である所以である。

この本願根本説の例証でも、念仏の要文が、本願に従っているとするが、この「本願」も、やはり四十八願であろう。念仏の要文は、第十八願が中心となって支えている。ここでも、やはり、第十八願本体説を維持しているのである。

ところでこれら、摂取文・化讃文・付属文・一日七記念仏文の四つの文が、いかに本願に依っているのか、以下に検討する。まず、これら摂取文などの四つの文の共通点は何かを見てみよう。念のため資料1④から抜粋して、当該文をあげてみよう。

(資料9)

何以知^チ之^{ナラハ}者、觀^ミ經^ニ所^レ說^ク光明^ヲ摂取^ヲ善導^シ積^ニ給^ニ、唯有^ニ念仏^ノ蒙^リ光照^ス、
当知^ニ本願^ノ最^モ為^ニ強^ク云^{ハク}。此^ノ積^ノ意^ハ者、本願^ノ故^ニ光明^ヲ摂取^ス聞^ヘ矣^{ナリ}。又此^ノ經^ノ下^ニ品^ニ上^ニ生^ニ双^ニ說^ニ聞^ニ經^ト稱^ト仏^ト、讚^メ稱^ニ仏^ノ之^ノ功^ニ不^レ讚^ニ聞^ニ經^ヲ之^ノ所^ニ善^ト導^シ積^ニ云^{ハク}、望^ニ仏^ノ願^ノ意^ヲ者、唯^ニ勸^ニ正^ニ念^ニ稱^ニ名^ニ。往^ニ生^ニ義^ニ疾^ニ不^レ同^ニ雜^ニ散^ニ之^ノ業^ト云^{ハク}。此^レ亦^ニ本願^ノ故^ニ、讚^ニ稱^ニ仏^ノ聞^ヘ矣^{ナリ}。又積^ニ同^ニ經^ニ付^ニ属^ニ文^ニ、望^ニ仏^ノ本願^ノ、意^ニ在^ニ衆^ニ生^ニ一^ニ向^ニ專^ニ稱^ニ弥^ニ陀^ニ仏^ノ名^ニ云^{ハク}。此^レ亦^ニ弥^ニ陀^ノ本願^ノ故^ニ、積^ニ尊^ニ付^ニ属^ニ流^ニ通^ニ給^ニ聞^ヘ矣^{ナリ}。又阿^ニ弥^ニ陀^ノ經^ノ所^レ說^ク之^ノ一^ニ日^ニ七^ニ日^ニ念^ニ仏^ノ、善導^ノ讚^シ給^ニ、直^ニ為^ニ弥^ニ陀^ノ弘^ニ誓^ニ重^ニ、致^ニ使^ニ凡^ニ夫^ノ念^ニ即^ニ生^ニ云^{ハク}。此^レ亦^ニ一^ニ日^ニ七^ニ日^ニ念^ニ仏^ノ弥^ニ陀^ノ本願^ノ故^ニ、往^ニ生^ニ聞^ヘ矣^{ナリ}。

いずれも善導釈文を引用し、そのうち、「本願故……」という形式になっている。また、善導釈文を注目するに、前三つ（摂取文・化讃文・付属文）いずれも、念仏を主張する根拠を、本願に求めている内容となっている。唯一、一日七記念仏文の善導釈文では、その点は微妙なものとなっている。すなわち同釈文では、もしかすると、念仏を主張する根拠ではなく、念仏往生を主張する根拠として、本願をあげているようにも受けとれる。したがって、その代わりか、法然解釈文では、一日七記念仏文の解釈のみ、「本願故」の前に、「此亦一日七日念仏」の文を配置している。他の三つの法然解釈文ではこれに類似す

る文がなく、「本願故」の前に位置するのは、単に「此^レ積^ノ意^ハ者」「此^レ亦」と、善導釈文に該当する文があるだけである。つまり、一日七記念仏文の場合は、善導釈文の意図が判然としないため、法然が私釈で、「本願故」の前に、「此亦一日七日念仏」を配置し、念仏往生を主張する根拠は本願であるというよりも、「念仏を主張する根拠は本願である」という意味内容を明示していると考えられる。

このように、これら摂取文解釈などの四つの文では、いずれも、「念仏を主張する根拠は本願である」で共通する。摂取文などの四つの文では、念仏を主張するのである。そして、その根拠を本願に求めるのだが、その本願は、当然、その根拠として十分な資格を有していなければならない。では、その「本願故」の内容とは何か。

その前に忘れてはならないのが、これら摂取文などの四つの文は、いずれも念仏往生の文である。故に、摂取文などの念仏の主張とは、その主張される行が往生行とすることを、先に決めて固定している。つまり、往生行とすることを前提として、念仏の主張を行っている。したがって、既述の「念仏を主張する根拠は本願である」をより詳しくすると、「往生行とするならば念仏であるが、その念仏を主張する根拠は本願である」となる。

それを踏まえて、本願の要素で、それに該当する往生行とすることを前提とするものを含むのは何かと考えれば、選択本願念仏説が浮かぶ。すなわち、選択本願念仏説では、往生行とすることなどを前提として、念仏を主張するものであった。つまり、

(資料2d)

往生行とするならば、念仏一行を主張する。

ということである。この内容が、「本願故」における「本願」の内容と考えられる。つまり、摂取文などの四つの文で、念仏を主張する根拠は、本願で念仏を主張しているから、ということである。これならば、「念仏を主張する根拠は本願である」の「根拠」として、本願は十分な資格を有している。同じ前提で、同じ結論を有しているから、根拠になりうる。あるいは、次のようにも表現しうる。摂取文などの四つの解釈文において、往生行を何にするのか、という問いが存すると理解可能である。その問いを解決すべく、参照する本願にあてがったならば、選択本願念仏説により、先の問いに対する答えとして、念仏一行が帰結する。本願が摂取文などの四つの文の根拠となる状況を、以上のようにも表現しうる。したがって、ここまでの考察をまとめて、摂取文解釈などの四つの文を資料10のように理解できる。

（資料10）

善導釈文の意は、本願で往生行を前提として念仏を主張しているので、……文でも往生行を前提として念仏を主張している、ということがある。

という内容である。この資料10のうち、「……」には、「摂取」「化讃」「付属」「一日七日念仏」を代入する。これら摂取文解釈などの四つの文は、このような資料10を意味するのである。

そして、資料10の摂取文などの四つの文が本願を根拠にする際、やはり、本願では、第十八願本体説が維持されていることになる。¹⁵例証だから当然であろう。

本項をまとめる。法然は、四十八願のうち、第十八願を本体とし、その典拠として、善導『法事讃』の文をあげる。また、道理上の根拠として、選択本願念仏説などが効いてくることは、既述したとおりである。そして、その第十八願本体説の一側面として、念仏往生の本願根本説をあげる。すなわち、第十八願本体説と本願根本説の関係は、前者の一側面が後者であって、それ故に、本願根本説は、第十八願本体説を維持している。更に、本願根本説の例証でも、当然ながら、第十八願本体説の構造を維持しているのである。そして、本願根本説の例証において、善導釈文は、念仏の主張が本願を根拠とする旨を示す。この時、「本願故」の内容の形成に、選択本願念仏説が効果を発揮するのである。すなわち、往生行を前提として、念仏を主張するという内容の提示である。この内容なら、摂取文などにおいて、往生行を前提として、念仏を主張するという根拠になるのである。

第三節第二項 念仏往生の教えへの帰依

次に、第十八願本体説や四十八願の法門という要素が、念仏往生の教えへの帰依を促すものであることを明らかにする。

『逆修説法』第三七日の資料1④の文では、法蔵菩薩の四十八願の法門に入るべきことを説く。このように、四十八願を「法門」といえるのは、四十八願の選択説と、資料8の文が要因となる。再び資料8を引用する。

（資料8）

名曰^{ナヒト}法蔵比丘^{ホトケ}。即^ス詣^キ世自在王仏所^ニ。右邊^{ミナミ}三匠^ニ長跪合掌奉^ニ讃^ス念^フ仏^ヲ

白言、我設淨土欲度衆生。願為我説經法。¹⁶⁾

資料8の傍線部に注目する。法蔵菩薩が、浄土を設けて衆生をその浄土に渡すと述べている。つまり四十八願とは、衆生を浄土に渡すためのものであることが判明する。

単に『無量寿経』説示の四十八願文のみの提示だと、その四十八願をいかに理解するか、示されていない。つまり、四十八願文のみだと、その文に対し、読み手は、どこに焦点を絞ったり、いかなる理解をしたらよいのかわからない。極端にいえば、同文のみの提示では、単に法蔵菩薩の行動などの事態が示されているにすぎないという理解もありうる。そこで、その四十八願に選択説とこの資料8傍線部の文の二つの要素を加味して、四十八願の内容に方向性を与え、読み手がいかに理解したらよいのかを示す。この二つの要素をへた四十八願とは、勝れた要素を提示する「教え」（法門）となる。というのも、四十八願とは、資料8傍線部の文により、衆生のためのものであり、選択説により、勝れたものを提示するものである。すなわち、衆生のためのもので勝れたものを提示することは、明らかに衆生に対して道筋を示し、訴え、直接に帰依を促すものであり、それは衆生に対して教え（法門）を説くことであろう。こうして、単なる「事態」から、「法門」に変換するのである。¹⁷⁾

そして、その四十八願のうち、第十八願が本体である。四十八願の法門には、第十八願本体説も含まれていよう。だとすれば、四十八願の法門とは、念仏往生の教えともいえる。四十八願の法門の中心が第十八願であるならば、それは、念仏往生を中心とした法門であること

になる。故に「念仏往生の教え」と表現しても、大過なからう。

この四十八願の法門に入門することは、その法門に帰依することを意味する。でなければ、「法門に入る」などとはいわない。四十八願の法門とは、念仏往生の教えともいいうるので、同法門に入門するということは、念仏往生の教えに帰依することを意味する。こうして、入門者は、念仏往生の教えへ帰依することになる。つまり、念仏往生を勧める意を暗に示しているのである。

第三節第三項 念仏往生の教えの体系

次に、念仏往生の本願根本説の役割の一つとして、念仏往生の教えの体系を示すことであることを明らかにしたい。

念仏往生の本願根本説とは、念仏往生は、本願を根本・起源とするという説である。その念仏往生とは、浄土三部経や、その他の一切諸經に説かれる念仏往生の文に存する。その様々な經典に説かれる念仏往生が、本願を根本とするのは、道理上、納得しやすいだろう。というのも、そもそも、阿弥陀仏の本願がなければ、極楽浄土や阿弥陀仏の存在はないし、第十八願もないならば、少なくとも本願力による念仏往生はない。故に、念仏往生が、本願を根本・起源とするのは、十分理解できよう。

そして、この本願根本説は、本願と各念仏往生の文を関係付けるものといえる。例えば、一切諸經の念仏往生文のうち、『般舟三昧経』の我名の文も含まれていよう。しかしこの我名の文は、同經において副次的な位置付けとも考えられる。すなわち、同經を見仏中心の經と

見た場合、往生を説く我名の文は、副次的な位置ともいえる。しかし法然は、我名の文をもっと重要な文と見ているはずである。つまり、法然の教えにとって、我名の文を含む念仏往生の文は、法然の教えの根幹の念仏往生の教えの重要な典拠である。つまり、法然の念仏往生の教えにとつては、副次的なものではなく、第一次的なものといえる。しかし同経の中では、副次的な位置付けとも解釈しうる。この齟齬をどうするのか、問題となる。

そこで、その諸経の念仏往生文を取り出し、本願と関係付ける。そのことにより、新たな意味をその念仏往生文に加えるのである。その諸経の念仏往生文は、その経の話の流れによる解釈もあるが、それとは別に、本願と関係した内容の解釈をするのである。つまり、その念仏往生文が、本願と関係することにより、その念仏往生文が、副次的なものから、第一次的な意味となるのである。

諸経の念仏往生文を本願に関係付けるといふ内容を提示する。この時、読み手は当然、その諸経の念仏往生文を本願と関係付けて理解する。すると本願では、選択本願念仏説や殊勝功德・易行故遍于諸機などにより、その念仏を優位に置く。これにより、その念仏往生を第一次的と理解するのである。¹⁸ 本願の念仏往生でも、諸経の念仏往生でも、同じ念仏往生ということに変わりはない。そして、同じ念仏往生なのだから、本願で第一次的となるなら、本願と関連付けられた諸経の念仏往生も第一次的になりうる。そのことを、読み手は理解可能である。

このようなことが成立するのは、一音説法という考え方が存するからである。この一音説法という考え方ならば、同じ念仏往生の文であ

っても、複数の解釈が可能である。その経の話の流れにより、副次的位置付けの解釈もあれば、本願と関係付けることにより、第一次的位置付けの解釈もあるのである。このように、本願を根本とする全ての念仏往生を第一次的とする役割を、本願根本説は担っているのである。

第四節 当該文における各要素の関係

当該文（資料1）の流れに沿って、各要素の関係を示す。

まず『無量寿経』が、浄土三部経の中で根本であるとする。『十住毘婆娑論』の文を引用し、その根本説の証拠とする。つまり、願は諸善の根本であるので、同経も、阿弥陀仏の誓願が説かれるので、浄土三部経の中での根本であるということである。そしてこの理論は、念仏往生の本願根本説の論拠でもあるのだろう。

その誓願の内容を示すため、法蔵菩薩の修行時代の話や、四十八願の選択を述べる。その法蔵菩薩の誓願のあと、瑞相がおこり、法蔵菩薩の成仏が約束される。この内容は、この法蔵菩薩の四十八願の選択が、虚しくないものであることを指摘するためであろう。つまり、四十八願の選択説を根拠付けている。

この四十八願は、世自在王仏の教えであり、それを法蔵菩薩は継承し、それを更に、釈迦が『無量寿経』の中で説いている。釈迦の教えであるけれども、法蔵菩薩の四十八願の法門に入ることを勧める。このように、釈迦の次元内よりも、ここでの話題は、法蔵菩薩の次元で捉えることを促し、その法蔵菩薩の四十八願の法門に入ることを勧め

る。なお、四十八願を「法門」といいうるのは、選択説と資料8傍線部を加味したが故である。このことにより、四十八願の勝れた要素の提示となり、かつ、衆生に道筋を示し、訴え、帰依を促すものとなる。これはつまり、法門の成立を意味する。そして、その四十八願の中で、本体は第十八願だとする。だとすれば、同法門に入門することは、念仏往生の教えに帰依することを意味する。つまり、念仏往生の教えに帰依すべきことを暗に説くのである。

また、第十八願本体説の道理上の根拠として、資料8の傍線部と選択本願念仏説があげられる。つまり、四十八願は、衆生を往生させるものとする。すると、その中心は第十八願・第十九願・第二十願となる。その往生行の話題の場合へ選択本願念仏説をあてがえば、念仏が帰結する。念仏を説く本願は、第十八願である。かくして、第十八願本願説が成立するのである。

そして、その第十八願本体説の一側面が、念仏往生の本願根本説である。というのも、この念仏往生の本願根本説の構造は、第十八願本体説を維持しているからである。

念仏往生は、本願を根本・起源とすると説く。その証拠文として、摂取文・化讃文・付属文・一日七日念仏文などをあげる。この時、選択本願念仏説が効果を発揮する。すなわち、法然の解釈は、「善導釈文の意は、本願で往生行を前提として念仏を主張しているので、……文でも往生行を前提として念仏を主張している、ということである。」（資料10）というものである。この内容の中で、「本願で往生行を前提として念仏を主張している」は、選択本願念仏説による念仏の主張

によって成立している。このように、選択本願念仏説により、この資料10の内容を成立させている。すなわち、善導釈文を含む摂取文などの四つの文の法然の解釈を成立させているのである。

更に法然は、上記文以外にも、『無量寿経』三輩以降や、その他一切諸経の念仏往生の文も、本願に従っている旨を示し、一切諸経の念仏往生の文が、本願を根本とすることを説く。

念仏往生は様々な経に説かれるが、それらは、本願に従うことにより、根拠付けられる。更に、選択本願念仏説や、殊勝功德・易行故遍于諸機の二義などにより、その本体の第十八願も根拠付けるのである。このように、念仏往生の体系を創設し、念仏往生が根拠ある教えであり、第一次的な教えであることを立証しているのである。一切諸経の念仏往生文は、その経では副次的であったとしても、同説の体系により、第一次的となるのである。

そして、その法蔵菩薩が、阿弥陀仏に成仏していることを指摘する。これは、願が成就し、阿弥陀仏が成仏していないと、四十八願が法門として効力を発揮しないわけであるから、このことを明示する必要があるのだろう。

おわりに

当該文（資料1）の全体的なまとめは、前節の第四節に譲ることとし、ここでは特に、選択説について簡単にまとめ、筆を置くことにしよう。

選択説を理解する重要な要素の一つは、同説の論理構造である。同説内の前提と結論の関係を把握することが肝要である。すなわち、第十八願の選択説では、往生行とすることが前提とし、念仏一行を結論とする。また、往生行としないことなどを前提とし、諸行を結論とする。第十九願・第二十願の選択説を想定すると、修行により往生するか否かなどを前提とし、（来迎・）往生することを結論とする。

選択説の論理構造から、往生行を主張するのは、第十八願のみとなる。同願では、念仏一行を主張し、諸行を主張しない。これは、四十八願の総意でもあり、その整合性を保つため、第十九願・第二十願の選択説の論理構造は、第十八願のそれとは、構造が異なることになる。第十九願・第二十願では、やはり諸行を主張しないようにしていると想定できる。

四十八願のうち、往生行の話題に絞り、選択説を加えると、右記のとおり、本願において往生行を主張するのは念仏一行なので、第十八願や念仏一行が導出される。この手法は、第十八願本体説・本願根本説において用いられる。

また、同説の論理構造により、狭義の本願領域内・狭義の本願領域外の峻別をもたらす。前者には念仏一行、後者には諸行が属する。そして、念仏・諸行共に、異質ではあるが、往生行であることを確保している。念仏一行は本願の行なので、主張内容である。肯定的に解せば、念仏一行を勧めているともいえる。諸行は非本願の行なので、主張内容ではないが、往生行ではあるので、諸行往生という事態を容認する。

ただし、第十九・二十願の選択説の明示をしようとしてしまうと、諸行往生の道を主張することになりかねない。そこで、註(10)でも指摘したように、第十九・二十願では、選択説を明示しない。これにより、諸行往生の道を主張するというはたらきを消すが、両願の選択説の内容は意味として隠れて存在するので、諸行往生という事態を容認しうる。

選択説により、往生行において念仏一行を主張し、諸行往生を一応容認するが、諸行や諸行往生を主張しない。この内容に整合性をもたせるため、選択説の創設の際、右記のような選択説の論理構造の構築や、第十九・二十願の選択説の不明示などの工夫をしているのである。

【参考文献】

- 安達俊英「法然上人における選択思想と助業観の展開」（『浄土宗学研究』一七、平成三年三月）
- 同「法然浄土教における諸行往生の可否―『選択集』第二章・第十二章を中心に―」（『仏教文化研究』四一、平成八年九月）
- 同「『選択集』における諸行往生的表現の理解」（『阿川文正教授古稀記念論集 法然浄土教の思想と伝歴』（山喜房仏書林、平成十三年二月））
- 宇高良哲『『逆修説法』諸本の研究』（文化書院、昭和六十三年十一月）
- 角野玄樹「法然における「傍」の語義についての一考察―特に『選択集』第四章の傍正義に関して―」（『仏教文化研究』五四、平成二十二年三月）
- 川島一通『『逆修説法』から『選択集』へ』（『大正大学大学院研究論集』二三、平成十一年三月）
- 岸一英『『逆修説法』（漢語系）三本対照』（私家版、平成三年九月）
- 浄土宗総合研究所編『黒谷上人語燈録写本集成―善照寺本 古本漢語燈録』（一（浄土宗、平成二十三年三月））
- 伊藤唯眞監修・眞柄和人訳註『傍訳 逆修説法』上・下（四季社、平成

十八年一月、平成十九年十一月

〔注〕

(1) 川島一通氏は、『逆修説法』から『選択集』へ(『大正大学大学院研究論集』二三、平成十一年三月)の中で、

念仏往生は弥陀の本願を根本とすると説示している。つまり、法然は弥陀の本願に「選択」という要素を見ていたからこそ、念仏往生の論理的根拠を本願に求め、本願念仏を説示したと考えられる。(同論文一四〇頁下。なお、一部誤字と思われるのを角野が修正した。)

と指摘される。これは、選択本願念仏説と本願根本説の関係性を示唆するものである。しかし、同氏のこの両者の関係性の議論は、この程度しか述べられていないようである。主な先学の論文を管見したところ、両者の関係性の議論については、わずかにこの指摘程度のものしか見つからなかった。

(2) 資料1の内容を本稿では、「本願解釈」と表現しているが、本来は、「法蔵因縁段解釈」とでもすべきかもしれない。しかし、同資料は、本願を中心に説いている文といえるので、便宜上、「本願解釈」と表現することとする。

(3) 浄土宗総合研究所編『黒谷上人語燈録写本集成―善照寺本 古本漢語燈録』一(浄土宗、平成二十三年三月)二〇二―二二頁。本稿における『逆修説法』の引用文の句読点は、全て筆者が付した。なお以下に、原文の訂正の跡などを確認しておく。資料1①の三行目では、「説」の右下・左下にそれぞれ何か文字があり、それを上から消している。同資料の③の三行目では、「竟」は元々「章」と記していたのを訂正してある。同資料③の六行目では、「御」は元々「即」と記していたのを「御歟」と訂正してある。同資料④九行目では、「門」は元々「聞」と記していたのを訂正してある。同資料⑤の二行目では、「于」は元々「示」と記していたのを訂正してある。同資料⑤の五行目では、「往」の左下に返り点「一」を消した跡がある。また資料1

は、『昭法全』では二五一―二五三頁に該当。

(4) 『大正蔵』第二六卷二四頁中。

(5) 念のため、第十九・二十願の文を引用しておく。第十九願の文は以下の如し。「設我得_レ仏、十方衆生、発_二菩提心_一修_二諸功德_一、至心発願欲_レ生_二我國_一、臨_二寿終時_一、假令不_レ与_二大衆_一围绕、現_二其人前_一者不_レ取_二正覚_一。」『浄全』第一卷七―八頁。第二十願の文は以下の如し。「設我得_レ仏、十方衆生、聞_二我名号_一、係_二念我國_一、植_二諸徳本_一、至心廻向欲_レ生_二我國_一、不_レ果遂者不_レ取_二正覚_一。」『浄全』第一卷八頁。なお両願の引用文の句読点は、筆者が付した。

(6) なお、第十九・二十願の選択説では、諸行を主張してはいないが、両願同説の全体の文から、諸行往生の道を主張しているように見える。だとすれば、第十八願の選捨と齟齬が生じ、本文の議論は誤りとなつてしまいかねない。この問題に関しては、註(10)で解決をしているので参照されたい。

(7) 浄土宗総合研究所編『黒谷上人語燈録写本集成―善照寺本 古本漢語燈録』一(浄土宗、平成二十三年三月)二〇四―二〇五頁。『昭法全』では二五一頁に該当。なお、引用文の傍線は全て筆者が付した。

(8) 安達俊英『選択集』における諸行往生的表現の理解(『阿川文正教授古稀記念論集 法然浄土教の思想と伝歴』(山喜房仏書林、平成十三年二月)一二〇―一二二頁に、この疑問に近似した見解がある。すなわち、安達氏は以下のように主張される。

念仏以外の一行、もしくは念仏以外の多行を往生行とするという
あり方が「選捨」された(更に言えば完全否定された)わけであるから、逆に言えば、極楽浄土への往生行は念仏一行のみということになる。つまり念仏以外は往生行ではないということである。

(中略) 私は以上のような理由から、「諸行非本願」とは「諸行非往生行」、即ち「諸行不往生」を意味すると推測するのである。(同論文一二二―一二三頁。中略は角野がした。)

(9) 『選択集』第七・十・十二章などで、念仏の本願故と諸行の非本願故を対にして説く。

(10) なお、なぜ『逆修説法』や『選択集』では、第十九願・第二十願の選択説を省略して、記述しないのだろうか。上記のように記述しうるように見えるのに、なぜ明示しないのだろうか。その解答は、以下のようを考える。本文に記した、両願の資料5a・資料6aは、以下のようなものであった。

(資料5a)

諸行を修行して、来迎・往生するか否かを選択して本願とするならば、来迎・往生することである。

(資料6a)

繫念かつ諸行を修行して、往生するか否かを選択して本願とするならば、往生することである。

もし、資料5a・資料6aを『逆修説法』などで肯定的に明示するならば、つまり、第十九願・第二十願の選択説を肯定的に明示するならば（その肯定的明示は、他の四十八願の選択説を見れば、そうなるのが自然であろう）、資料5a・資料6aの内容を主張することをも意味する。というのも、肯定的明示とは、読み手に何かを伝えようとするものである、主張といえる。この主張というはたつきは、肯定的に明示することによって生じるのである。そして、資料5a・資料6aの内容を主張として扱い、まとめて変換すると、以下のようにも解釈しうる。

(資料1)

諸行を修行すれば往生する、という道を主張する。

しかし、この資料1は、第十八願の選択の内容、つまり、

(資料2)

往生行としての諸行の道を主張しない。

と両立できない。なぜなら、資料2に従う衆生は、諸行を修さないので、資料1の内容の諸行による往生の道を歩むことはない。

こうして、第十九願・第二十願の選択説は明示しづらいのである。明示すると、第十八願の選択の内容と齟齬をきたしかねない。そのような齟齬を阿弥陀仏（法蔵菩薩）がするはずがない。よって、第十九

願・第二十願の選択説は明示しづらいのである。（ただし、資料5a・資料6aの明示は、単に諸行往生という事態を示すものとも解釈できる。しかし、読み手が資料1のように理解するのも十分ありうるとすれば、右記のような齟齬が生じる。これも齟齬を、法然は念のため回避したいのである。）

しかし右記のとおりだとすれば、第十八願の選択により、第十九願・第二十願の選択説の明示どころか、意味さえなくて、第十九願・第二十願の選択説そのものが成立せず、実質、第十九願・第二十願の選択はないものとして扱わざるをえないのでは、という批判が出るかもしれない。これは、四十八願全てに選択があるという法然の意に反するだろう。したがって私見では、両願の選択説は、明示はしないが、隠れて意味として含んでいると考える。

すなわち、両願は、要は、諸行を修行して往生するという事態を意味する。本文にある資料5b・資料6bを再度あげよう。

(資料5b)

諸行を修行するならば、来迎・往生する。

(資料6b)

繫念と諸行を修行するならば、往生する。

つまり、私見の第十九願・第二十願の選択説の明示はせず、隠れて意味として含むというのは、両願の選択説を明示しないことにより、諸行往生の道を主張しないが、第十九・第二十願の選択説が隠れて存するという想定により、諸行による往生という事態を意味として含んでいる、ということである。明示しないことにより、主張というはたつきを消し、第十九・第二十願の選択説が隠れて存するという想定により、事態としては残っているのである。これに対し、第十八願の選択とは、諸行を主張しないということであって、諸行往生という事態とは別次元である。したがって、第十八願の選択と、不明示の第十九願・第二十願の選択説とは、十分両立可能である。このように、第十九願・第二十願の選択説は、明示はしないが、諸行往生という事態を隠れて意味として含むのは可能なのである。明示しないことにより、主張とい

うはたらきを消し、隠れて意味として含むのみならば、主張というはたらきが生じないのである。

しかし、次のような問いはありうるかもしれない。すなわち、『逆修説法』では、『観経』の定散二善の説示の中で、諸行往生を記述している。例えば、

(資料三)

今此観無量寿經有二意、初明修定散二善而往生、次明称名号而往生。(浄土宗総合研究所編『黒谷上人語燈録写本集成―善照寺本 古本漢語燈録』一(浄土宗、平成二十三年三月) 一五九頁。『昭法全』では二三八頁に該当。)

と、定散二善により往生できることを明かしているし、他にも所々で定散二善の往生を示している。そのように示す一方、『観経』付属文の解釈においては、定散二善を付属せず、念仏を付属する。このように、『観経』では、定散二善の往生も明示しながらも、付属の文で諸行を主張しない。このように、本願の選択説においては、諸行往生を明記せず、一方の『観経』解釈においては、定散二善の諸行往生を明記する。この違いは、何によるのか、という問いである。この問いに対しては、以下のように解答しよう。

『観経』の文を読めば、定散二善の部分のみでは、念仏往生も諸行往生も、両方を主張しているといえる。また、第十八願の選択本願念仏説と、第十九願・第二十願の選択説の明示とは齟齬があるが、定散二善のみの中には、特に齟齬はないのである。なぜなら、機根の違いにより、修する行は異なるから齟齬はない。そして、付属の文においては、念仏のみを主張している。一見、定散二善文と付属文とに齟齬があるようだが、やはりそれは機根の違いによって回避するのである。同経では、草提希の要請や九品の性質などの要素があるので、機根の違いという要素を導出できる。つまり、『観経』は、そのような流れで説かれていると、法然は理解しているのである。同経解釈には齟齬はないのである。

一方、本願文においては、第十八願の選択本願念仏説があるので、

前述したように、第十九願・第二十願の選択説は明示しないのである。仮に、『観経』解釈のように、機根の違いによって齟齬を回避しよう

にも、その「機根の違い」に対応する要素が、本願文の中に存しないので、『観経』解釈のようにはしなかったと考えられる。したがって、『観経』解釈では、諸行往生を明示するが、本願の選択説では、第十九・二十願解釈を明示しないのである。

なお私見とは異なり、諸行非本願、とある「本願」を第十八願とし、第十八願では諸行を選択している、非本願といえる、という解釈もあるように見える。しかしこれはやや不自然である。もしこの解釈だと、第十八願以外の他の四十七願は、本願でないことになってしまふ。また、諸行非本願、としている文脈上、その「本願」とは、四十八願と理解するのが穏当であろう。第十八願のみとするのは、恣意的であろう。

(11) 浄土宗総合研究所編『黒谷上人語燈録写本集成―善照寺本 古本漢語燈録』一(浄土宗、平成二十三年三月) 二〇三頁。『昭法全』では二五一頁に該当。

(12) あるいは、別願だけではなく、総願も含めたものかもしれない。

(13) なお、『逆修説法』第一七日において、

(資料四)

凡 此三輩中各雖説菩提心等、余善望上本願、專在令称念弥陀名号、故云一向專念。上本願者、指四十八願中第十八願也。(浄土宗総合研究所編『黒谷上人語燈録写本集成―善照寺本 古本漢語燈録』一(浄土宗、平成二十三年三月) 一五六頁。『昭法全』では二三七頁に該当。)

とする。この資料四では、「望上本願」の「本願」とは、四十八願の中の第十八願であるとする。私見によれば、「本願」とは、四十八願全体なのに、それに反するような文が見える。これはどのように理解すべきであろうか。

以下のように考えるべきである。私見においても、直接念仏往生を支えるのは、やはり第十八願である。故に、資料四の文は、そのこと

を指摘したものであろう。私見では、その第十八願は、四十八願全体と不可離であるとする理解である。念仏往生を支える際、第十八願は四十八願全体と離れることがない、ということなのである。よって、私見と資料四とは、矛盾しないと考える。両者は、文脈による表現の仕方の違いであらう。

- (14) 浄土宗総合研究所編『黒谷上人語燈録写本集成―善照寺本 古本漢語燈録』一（浄土宗、平成二十三年三月）二〇七―二〇八頁、『昭法全』では二五二頁に該当。

- (15) ちなみに、これら例証以外に、『無量寿経』の三輩文以降や、その他一切諸経の念仏の要文についても、法然は、本願に従う旨を示す。これらの文においても、本願に従う際、四十八願と不可離の第十八願に従っている。つまり、第十八願本体説を維持するのである。

- (16) 浄土宗総合研究所編『黒谷上人語燈録写本集成―善照寺本 古本漢語燈録』一（浄土宗、平成二十三年三月）二〇三頁、『昭法全』では二五一頁に該当。

- (17) 『無量寿経』に四十八願を単に説く時点で、それは広義では教えといえるかもしれない。しかし、この単なる広義の教えとしての四十八願では、読み手はどのような意味を含む教えなのか、明確にはわからない。つまり、方向性が不明瞭故、どのような心構えて帰依したらいいのかわからない。そのような帰依は、直接的にその教えに帰依しているとはいえないだろう。したがって、この広義の教えとしての四十八願と、直接に帰依する対象である法門としての四十八願とは、区別すべきであらう。

- (18) この殊勝功德・易行故遍于諸機の二義では、念仏の功德が勝れており、念仏が易行であり、諸機を救う故、念仏を選び、諸行を捨てているのである。つまり、この二義が念仏を主張し、諸行を主張しない根拠である。念仏を優位に置く根拠である。

ところで、この二義は、本願根本説のあとに出てくる。これに対し、この二義に該当する『選択集』の勝劣義・難易義の場合は、選択説の直後に出てくる。すなわち、『逆修説法』の場合、選択説のあと、第

十八願本体説や本願根本説が間に入って、そのあと件の二義が現れる。一見すると、この二義は、選択本願念仏説を承けてのものであるので、『選択集』の順序は納得しやすいだろうが、『逆修説法』の場合、なぜ、選択説の直後に出ないのか、わかりにくいように見える。なぜ『逆修説法』のような順序になるのだろうか。

その解答は、以下のようである。先述したように、『逆修説法』の本願根本説における、摂取文などの四つの文の議論で、念仏を主張する旨を明らかにした。おそらく他の念仏往生の要文でも、何らかの形で、念仏を主張しているということなのであろう。その根拠となるものが本願であると同書では説く。そして本願が根拠であれば、更に根拠を求めるのが、議論の流れというものであろう。その更なる根拠が、殊勝功德・易行故遍于諸機の二義なのである。この根拠付けの流れを重視して、この二義を、本願根本説のあとにしたのであろう。つまり、同書の〈本願根本説↓二義〉という配置順は、根拠付けの流れの順となっているのである。そして、本文において検討した体系以外にも、このような根拠付けをした上での念仏の主張を一貫させた体系をも構築しているのだろう。

（かどの はるき 非常勤講師）

二〇一二年十一月十三日受理